

1

【出題意図】

5世紀から7世紀に至る東アジア社会の変動において、倭国（日本）がどのような対外関係を構築していたか、またそれによって新たな技術や文化をいかに摂取したかを理解しているかどうかを問う。

【採点のポイント】

- ① 5世紀における倭の五王による南朝への遣使とその背景にある朝鮮半島情勢。
- ② 朝鮮半島の動乱を背景に、日本列島に渡った渡来人が機織などの技術や知識を伝えたこと。
- ③ 仏教が6世紀に百済から伝わり、6世紀末には本格的な寺院である飛鳥寺が造営されたこと。
- ④ 飛鳥時代になると遣隋使、遣唐使が派遣され、留学生の中には僧旻のように、国博士として活躍した人物もいること。
- ⑤ 660年の百済の滅亡とその復興のための白村江の戦いで唐新羅連合軍に敗れたのち、大野城や水城を築くなど国防の整備がなされたこと。

2

【出題意図】

17～18世紀の三都と商業の発展について、その特徴を提示した語句を中心に正しく理解しているかを問うた。

【採点のポイント】

- ① 17世紀前期の豪商の活躍から17世紀後期の鎖国体制確立後の、三都や城下町における問屋・仲買・小売の成立、振売などの多様な商業の変遷を理解できているか。
- ② 三都の発展として、江戸は幕府の施設・大名藩邸や町人地の密集により人口が増加し日本最大の消費都市となった。大坂では蔵元・掛屋が諸藩の蔵屋敷で蔵物を販売し、各地の産物は納屋物として取引された。京都では天皇や公家・大寺社が多く、西陣織や京染などの高度の手工業生産が発達したなど、説明できるかどうか。
- ③ 海運による全国市場の確立によって、十組問屋・二十四組問屋など、多様な職種の間屋仲間の連合組織が作られる。問屋のなかには越後屋呉服店の三井家などが、三都や城下町に出店を展開していく。問屋は豪農とも連携し、農村部で問屋制家内工業を発展させていくことについて、理解できているか。

3

【出題意図】

本問は中国近代史上で重要な南京国民政府を設立、主導した蔣介石の事蹟を、とくに日中戦争以前にしぼって論述させる設問である。そのさい、重要な用語の使用を義務づけて、それぞれの用語、また用語間の関係があらわす時期的な範囲・歴史の推移を正確に把握、理解できているか、また適切な表現ができるか、を総合的な評価のめやすとした。

【採点のポイント】

1926年に蔣介石が率いる国民革命軍が北伐をはじめたこと、その過程で1927年4月、上海クーデタを起こして、国共合作を解消して共産党と敵対関係になったこと、翌年、北京政府を倒して中国を統一し、関税自主権の回復や通貨の統一など、対外的な地位の向上と経済発展に資する政策を推し進めたこと、にもかかわらず、1931年の満洲事変に至る日本との対立を深め、部下の張学良に拘束された1936年の西安事件を機に、共産党との協力に転じて、日本との全面对決姿勢をとるようになったことなどが、解答のポイントである。

4

【出題意図】

【採点のポイント】

以下の4点が解答できているかを重視する。

- ① 大半のヨーロッパ諸国が実質的に主権を持って参加した国際会議で、この講和条約がまとめられたこと。
- ② ウェストファリア条約により、帝国内のドイツ諸侯の自領邦における主権が認められ、神聖ローマ帝国皇帝の権限が縮小し、帝国が事実上解体されたと言われること。
- ③ ウェストファリア条約により、スイス・オランダの独立が承認され、またスウェーデンが北ドイツ沿海地域を獲得して、バルト海の両岸に領土を持つバルト帝国として強国化したこと。
- ④ 神聖ローマ帝国の分裂状態、ハプスブルク家の凋落の一方で、プロイセンがドイツ内の強国として台頭すること。